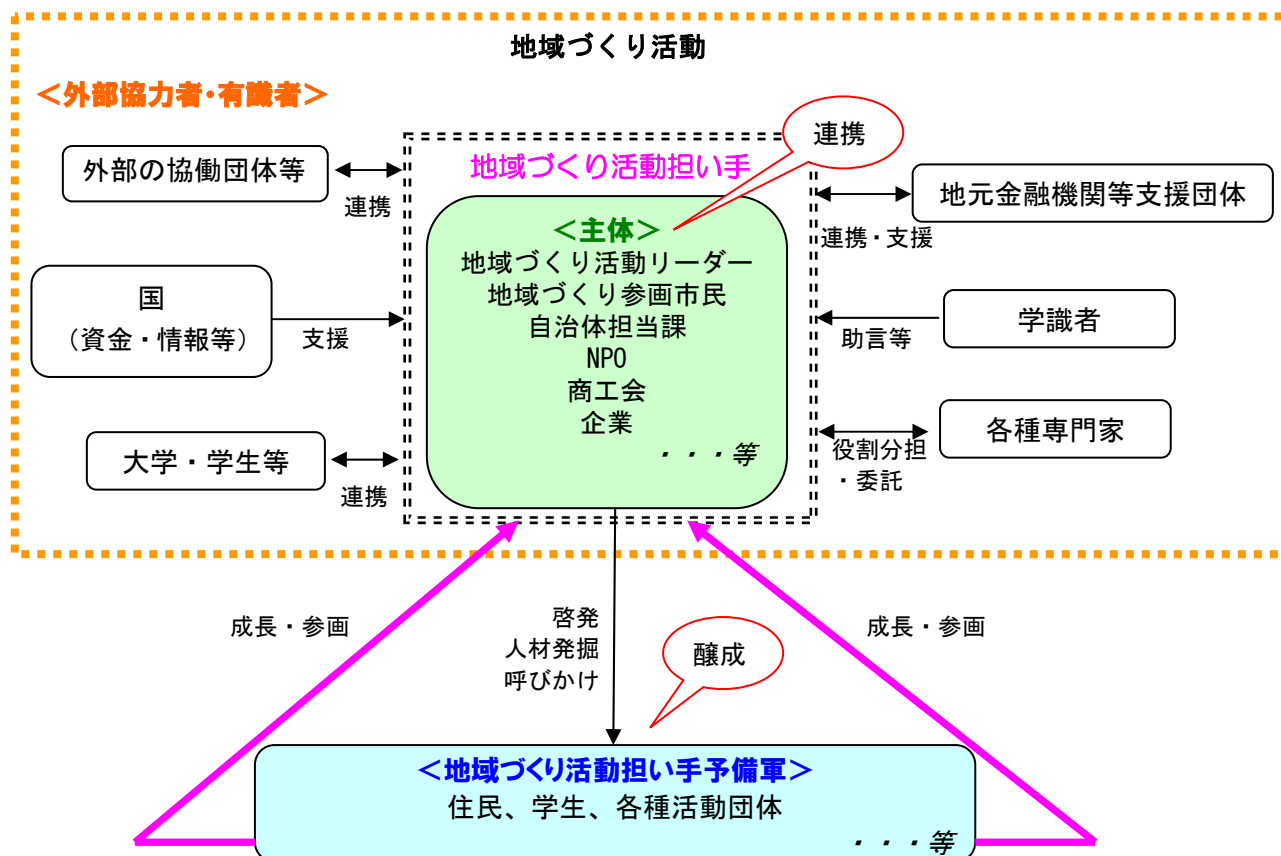


3. 地域活性化に向けた理解醸成のあり方等について

(1) 理解醸成を図る際に踏まえておくべき事項

- 本調査においてシンポジウム・ワークショップを開催した北海道平取町・岡山県笠岡市における地域づくり活動担い手の構成や主体的な組織は、様々であり人材の属するセクターで分類すると、大きくは行政、NPO、地元団体等に分類される。
- シンポジウム・ワークショップでは、これらのセクターや人材が「共同」「協働」「連携」「ネットワーク」することの意義が改めてクローズアップされるとともに、地域づくり活動を持続的に行う観点からも次世代の地域を背負う人材の育成や、その指針となるコンセプトや目標等の明確化の必要性等が指摘された。
- 理解醸成とは地域を担う仲間づくりや後進を育成する際に用いられるべき手段であり、「何のために理解醸成を図るのか」ということではなく、「何のために理解醸成を図り仲間づくりや後進育成を図るのか」ということを常に意識しながら活動を行うことが肝要である。そうすることで漫然と仲間づくりや人材育成を行うのではなく、「地域にどのような人材や仲間が必要であるからこそ、どういった人を対象にして理解醸成を図ろう」等、目標等が具体化されることになる。
- 次に、理解醸成の取り組みを図る上でのポイント等を記す。

<地域づくり活動を取り巻く関係者の相関図(例)再掲>



(2) 理解醸成の取組ポイント

- 理解醸成の対象となる人物は地域が抱える課題や目的等によって様々であるが、「地域力のボトムアップとして多くの仲間が欲しい」、「コーディネーター能力やプロデューサー能力がある人が欲しい」「地域を引っ張ってくれる若手リーダーが欲しい」等多岐にわたる。
- 北海道平取町、岡山県笠岡市ともに活動の幅が広く必要な人材也多岐にわたるが、あえて言うならば、北海道平取町では様々な活動組織は既にあるため、それらを取りまとめるコーディネーター能力が必要であり、岡山県笠岡市では活動組織間を繋ぐコーディネート機関はできたので、現在はさらに交流を生み出す仕掛けや経済活性化に資するアイデア等を生み出すようなプロデュース能力が必要だと言える。このように地域の実情やこれまでの活動経緯等により取り組む方等にはもちろん違いはあるものの、ここでは両事例を分析し理解醸成の取り組みを図る上でのポイントを記す。

■自分の住まう地域を知ること

自分の住んでいる町にどのようなヒト・モノをはじめとする資源や魅力が存在するのか、発掘できる可能性があるのかを知ることが大事。人を仲間にした後進の育成を図る際に自分が相手に自信をもって地域の実情や地域づくり活動の楽しさ・今後の可能性を語る必要がある。

- 自分の地域は、みんな知っている。しかし、どこに何があるかということは知っているけれど、それにどんな価値があるのかということ、ちゃんと語れるか。日本各地や世界と比較して自分達の住まう地域の特徴や価値を知るためにも、改めて学び直したり、特徴や価値の再構築等を行うことが望ましい。
- いろいろな人をお互いに知ることになったら、今度は、その元気を自分のところに、ためにどういうふうに使うかということを考えることができる。

■理解醸成を図る目標・目的の明確化（コンセプトメイキング）

理解醸成は仲間づくりや人材育成の手段とすると、何のためにそれらをするのかということを棚卸して考えておく必要がある。目標や目的が不明瞭なまま活動が続けると活動に停滞や支障をきたす恐れがある。効果・成果が見られるまで一朝一夕ではなく時間がかかる取組だからこそ、活動の指針ともなるべき目標・目的、コンセプト等の策定が必要となる。

- ある目標さえはっきりしていれば、それに向かい努力し実現できる人達が多いのは事実。
- 活動の成功要因の一つとして、地域づくりのコンセプト、目標が明確に定められた上で、ターゲットと戦略、それを遂行する期間といった計画がしっかりと策定されていることが必要。

■交流機会やコラボレーションする機会の創出

地域づくりやまちづくり活動は多くの人々の参画があって初めて動きだすものである。有する能力やスキルが異なる人や組織が交流することで新たな取組が生まれる可能性や既存の活動であっても効率性が向上したり活動を活発化するアイデア・ヒント等が創出される可能性がある。さらには、そうしたアイデア・ヒントを具体化するためにも関係者間のコラボレーションが必要であり、そうした活動の結果が新たな価値の創出に結びつく。

- 協力して働く、コラボレーションとは、違う力を結集して飛躍的な力にすること。昔、共同という、これは日本の伝統的な社会が得意な、みんなで力を合わせる。これは同じタイプが力を合わせたわけです。だから共に同じと書くのは、非常にいい表現である。農家が集まって一緒に道普請をすとか、あるいは昔の農村では、誰かの家を建て替えるときにみんなで手伝ってという意味の際に使用される。いま、同じタイプの人が集まっても、次の時代のための新しいアイデアはなかなか生まれない。違うタイプの人が集まって、いろいろ違う意見を重ねる中で、新しい方向が見えてくる。
- まちづくりは「ひと」づくりというのは、1回成功した、2回成功した、3回成功したから、それで終わりではない。新しい仕掛けを次々に行わなければならない。どんどん進化していくということ。終わりのないそういう活動というのがまちづくり。

■地域づくり活動担い手予備軍を導く

地域内外の若者等を地域づくり活動等への取組に参画させる動きがみられるが、交流の仕方、人との関わり方、間合いの取り方等、作法や慣習といったものは地域の特色が現れるものであり、それらを踏まえた上で活動を行うことが肝要である。そうした地域づくり活動予備軍を指導するのは現在活動しているメンバーであり、地域のことを良く知る先達として後進を導くことが必要である。

- 単なる経験の旅に行くというようなことを超えて、住民票を移して、会社も辞めて、人生の中での3年という期間をまちづくりに注ごうという若者が、定年者も含めてですが増えるなどの新たな動きもみられる地域がでてきている。その地域に住み込んで、一緒になってまちづくりをやっという人たちの存在。これが世の中に増えてきている。
- 生活を成り立たせるためには都心へ出ていかななくてはならない現状がある一方で、高齢者の側としては孫の世代に「田舎」を持たせてあげること、都会の生活とは全く違うより空間を提供できるようにすることがとても重要。

※地域づくり活動担い手の育成手法に関しては平成 23 年度に取り纏めた国土交通省 都市・地域整備局地方振興課「地域再生を担う人づくり支援調査業務報告書」を参考にされたい。